

私の歩んできた道

斎藤 是心

私が今日までに禅の道に導かれてきた体験のいくつかをお話させていただきます。自己紹介にもなり、皆様のご参考になれば幸いです。

一 若かった頃

十代後半、人間とは何か、いかに生きるべきかということが大きな疑いとなりました。その解決として文学と宗教に関心を持ちました。しかし究極のことは分からないまま、私なりに思いをまとめた詩があります。

人 生

人生は真心で

仕事を楽しみ

交わりを楽しみ

芸術を楽しみ

明るくすすくと生きたい

今思うと、教団の「正しく、楽しく、仲よく」に通じているように思います。

その後、沢木興道の『禅談』という著書に心を引かれました。その本には、ある坊さんが山にさしかかると、そこは人を食う化物が出る

山だと村人に止められたが、坊さんは大丈夫だと言って山に入り、案の定化物に食べられようとした。坊さんが「お前は分かっていないが、俺はお前であり、お前は俺だ。俺を食べるといことはお前を食べるといことだ。食べるなら食べてみよ。」と言うと、化物は驚いて逃げ去ったという話が載っていましたが、「俺はお前であり、お前は俺だ」という言葉に驚いたことが鮮明に心に残っています。「自他一如」ということに通じる話だと思います。

また、鈴木大拙の著書にも啓発されるものがありました。特に禅が日本文化の核になっているということ、美術・剣道・茶道・俳句・武士道などは、禅の精神がバックボーンになっていることを知りました。

私たちの町には善修院という禅宗の寺があり、終戦後の若い者の文化活動の拠点でもあり、人間禅でも道場として長らくお世話になりました。住職から「君、薫習という言葉を知っているかい？ 人間はいくら口で言いきかせても駄目で、本当は人から人に無言の中に伝わるものがあって、それが薫るように染まるように身に付いていく。それが真の教育ということなのだ。」という話を聞きました。私はこの話を聞いていたく共感したのです。家庭内は、まさに薫習の場である。もちろん愛情も大事だが、子供たちのためにも自分の身を厳しく慎まなければならないと思ったのでした。

二 職 歴

私は土木技術者として国鉄に勤務していましたが、昭和19年から10年間の終戦前後は現場機関に勤務し、郷里の網代町から通勤しました。本社勤務とともに、津田沼から船橋に引っ越し宿舍住まいとなりました。国鉄を退職するにあたり、神奈川県大和市に住居を求め、現在に至っています。退職後も20年間、技術士として設計会社に勤務してきました。

津田沼、船橋に往んでおりましたときは本部が近くなりましたが、

禅の修行は一貫して岳南支部に所属させてもらいました。年3回の撰心会には有給休暇のほとんどを当てました。「撰心会に行って来た後は目が澄んでいますね。」と同僚に言われ、職場でも理解をいただきました。私なりに仕事も悔いなく楽しむことができました。

三 窪田空穂のこと

私の文学志向は、歌誌『菩提樹』^{ぼだいじゆ}の主宰である大岡博先生とご縁を得て、窪田空穂^{くぼたうつぼ}を知ることになり、短歌の道に集約されてきました。

空穂の短歌は、人生いかに生きるかということが根底にあり、禅と同じように人間形成の道に他ならず、私はその著作から大きく影響を受けることとなり、生涯の師と仰いでいます。

かりそめの感と思はず今日を在る我の命の頂点なるを

これは空穂の作品ですが、「すぐれた歌人は、そぞろに思ったことに対して、それを動かすべからざるものと信じて表現する。……一度意識された思いが、かりそめの感となるかならないかで、人間としての精神の在処は大きく分かれてしまう。」という言葉もあり、心の持ち方を示すものとして私の拠り所となっています。この他にも、

かたわらを人は通れど見も向かず芋掘る人よわれもしか住まな

槍ヶ岳そのいただきの岩にすがり天の真中に立ちたり我は

など沢山の歌があり愛唱しています。

私の人生は、仕事と短歌と禅の三本立ての道を歩むことになりました。

四 磨輒庵老師のこと

岳南支部は昭和14年に結成された古い支部ですが、終戦前後には一時お休み状態になっていました。昭和24年教団発足の頃の支部長であった間瀬活水さんから「出家しなくても本格の禪の修行ができる。私の息子と一緒に参加しなさい。」と、親友の間瀬溪山と一緒に参加するように誘われていました。

耕雲庵英山^{みょうだい}の名代として磨輒庵^{ません}劫石^{ごっせき}老師が岳南支部を担当されることとなり、一夕座談会が催されました。老師からは「うそをついてはいけない。」「死の問題を他人事としてはいけない。」という二点のお話を伺い、私は目の覚めるような感銘を受けました。そして、そのように生きている人が今ここにいるのだ。この人に付いていこうと覚悟し、早速入門させていただくことになりました。

五 耕雲庵老師のこと

老師には、私なりに親しくお導きいただきました。老師にとって私は孫弟子になるので、直弟子の皆さんが語るような厳しいことはなく、むしろやさしく接していただきました。二世総裁の妙峰庵孤唱^{みょうぶ}老師から、老師が第二句集『続句津籠』を鎮西支部の百雲碧層さんの所から出版するので、校正や百雲さんとの連絡のお世話をするようというお話がありました。一度だけ同行していただきましたが、後は直接伺うようということになりました。

ある時老師に「句集の中の この坂はいつも風あり蝉しぐれ という句が好きです。」と言うと、「それは実感の句だからよく分かるのだろう。私の句には宗旨があるから。」と言われ、その方が大切なのだと私は受け取りました。

いろいろ思い出がありますが、本部周辺の団員が交替で老師のお酒のお相伴をするというお話がありました。

昭和54年4月14日の土曜日、岳南支部から山田真常居士と私が伺い、磨甕庵老師もご一緒されてのお相伴に加わることができました。私もが持参した^{さわら}鱸の刺身と、老大師の頂き物という松茸を焼き、緑水様が^{かん}お燗の番をしてくださって、^{ばんざん}にぎやかな晩餐でした。

老大師は定量の2本を召し上がられるとのことで、私も徳利のお替りをいただき、いい気になっていましたが、突然「君、機をみなければ駄目だよ。」と言われました。すでに老大師は食事を始められ、磨甕庵老師も真常居士も、それに合わせて杯を置かれているのに、私だけが未練がましく飲んでいことに気付きました。機を見るに鈍な私の至らなさをたしなめられたのでした。冷汗の出る思いでした。

見事な^{えび}海老の描かれているぐい飲みにいっぱいお酒をつがれ、「わしはこれを持って退場するからな。」と機嫌よくお別れしたのですが、それから1週間後にお亡くなりになるご様子とはとても思えませんでした。

六 禅語二題

最後に、禅語を二つ取り上げて終りといたします。如々庵^{とう}洞然老師に『禅語の茶掛 一行物』という著書があり、沢山の禅語が親しみ深く解説されています。ご一読をお薦めいたします。

^{ほうげじゃく}
放下着

「捨ててしまえ。」という言葉です。毎日の生活の中で生まれてくる観念に引きずられないように、我とわが身に言いきかせ、明るくさばさばとした境涯で生きたいと思います。

^{しょあくまくさ} ^{しゅぜんぶぎょう}
諸悪莫作 衆善奉行

「悪いことはするな、善いことをせよ。」という言葉です。簡単な言葉ですが、他に対する心得として、心していきたいものです。

(平成18年11月22日、岳南支部・東京第二支部合同撰心会の法話より)

著者プロフィール



斎藤是心（本名 / 正幸）

大正11年、熱海市生まれ。技術士（建設部門）、鉄道建造物の建設と保守に携わる。歌人。昭和28年、窪田空穂門下の大岡博氏に師事。『菩提樹』同人。歌集『秋の陽のなか』『六月の風』。昭和32年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅布教師。庵号/慈雲庵。

日本文化と禅

茶道 肥後古流について

中村 慈光

熊本に古くから伝わる茶道を「肥後古流」といいます。私はその中の「的々社」に所属しています。肥後古流は、肥後藩主細川家との深いかわりの中で今日に至っています。

細川氏は文武両道に秀でた名家で、三斎（忠興）公（1563～1645年）は茶道を千利休に学び、利休七哲の一人に数えられています。利休が秀吉の怒りにふれて堺に下る時、三斎公と古田織部が見送ったという話は有名です。その子忠利公も父祖の優雅の風を受け、茶道を嗜み、前封地の小倉にいた寛永2年（1625年）に、利休正伝の茶法を受け継いだ古市宗庵を禄高二百石で召し抱えました。ここに肥後藩の茶道が誕生したのです。

千利休は、本能寺の僧だった円乗坊宗円を還俗させ娘婿にして、直

伝の秘法ごくしん極真だいすの台子を伝授したといわれています。宗円も実子道鉄ではなく、娘婿の宗庵に伝授しました。ここに千利休 円乗坊宗円 古市宗庵と利休直伝の茶事が継承されました。

また、宗庵が後年上洛したとき、千宗旦そうたんに請われて一夕茶会を催し、そこで利休直伝の茶法および極真台子盆点法を伝えました。そのとき、宗旦からお礼に「ふつぽうてきてき佛法的々」の書（115ページ写真）を贈られています。これが「的々社」の由来です。

細川家が宗庵を茶道方に命じた折、「古風の茶の湯伝授つかまつ 仕そうろり候ふ者を召し置かれ度し」として招いたとのことで、三斎公も忠利公も利休の点前を変えることなく、そのまま伝えることを命じています。その後、古市家は十世まで茶道方を務め、明治になって高弟の武田家がこれを継ぎました。その間、古市家は小堀家（初代小堀長斎）、古田家（初代萱野隠斎…萱野の父は古田織部の弟で、徳川家にはばかって姓を萱野に改めましたが、明治維新後に本姓の古田に戻しています。）に古風の茶を伝えました。この三家を「肥後古流御三家」と称しています。参勤交代にも持回りで勤めたそうです。茶道の比較研究をしておられる磯野新威氏によれば、やはり古い武家の点前であるといえます。

その元は同じふくさ（袱紗は右腰に着ける。半東はいない。花は一種など。）でも、現在三家は少しずつ点前が違っていています。これは、長い伝承の間にはやむを得ないことでしょう。

肥後の細川家としては、江戸での交際の必要からか、この三家の他に遠州流を茶道に加えていました。遠州流が「新流」と俗称されたので、これに対し肥後の三家を「古流」と呼んだのであろうといわれています。

的々社（武田家）の会員名簿は、その冒頭に【珠光常に門人を戒めいて曰く 茶道の徳たるや。須すべからく儉を守るをもて旨とすへし。故に

足らずして足れりとなす。美麗を好むことなかれ。信を以て交はらされは茶友にあらず。もつはら内につとめて外を飾ることなかれ。戯言ざれごとは必ず狂を発す。語実儀にあらされは言うことなかれ。業は心身を離ることなかれ。行住坐臥その本文を動かさざるを以て至れりとなす。】と、村田珠光の言葉が掲げられています。

的々社では、1月の虚心庵（家元）初釜・理事会・細川家献茶式こうしょうけん（仰松軒：三斎公好みの茶室。京都天竜寺真乘院より移したもので、細川家菩提寺の泰勝寺跡にあり、ここには細川初代幽斎公、二代三斎公夫妻の廟や宮本武蔵の供養塔があります。）から、11月の円乗坊忌茶会（妙立寺）、12月の反省会、来年度行事打ち合わせまで毎月行事が組まれています。

3月は利休忌茶会（妙立寺：利休の消息文、竹花入が飾られます。）
 4月は敬老茶会（出水神社：明治11年（1878年）細川家を慕った旧藩士たちが水前寺成趣園の中に創建しました。幽斎公を初め歴代藩主とガラシャ夫人が祭られています。）
 5月は青年部若葉茶会（見性寺）
 8月は薪能協賛茶会（出水神社。古今伝授の間：後陽成天皇の弟の桂宮智仁親王が幽斎公から古今集の秘伝を授けられた所で、大正元年に移築復元されました。杉戸は狩野永徳、襖絵は海北友松の筆と伝えられています。）があります。



仰松軒

献茶式は、出水神社では春（4月）と秋（10月）に、藤崎八幡宮（熊本
本の総鎮守で、江戸時代は熊本城の鎮守社でした。935年に創建され
ました。）では9月に執り行われます。年5回指導者のための研究会
も開かれています。2、7、12月を除いて、毎月お茶会があります。

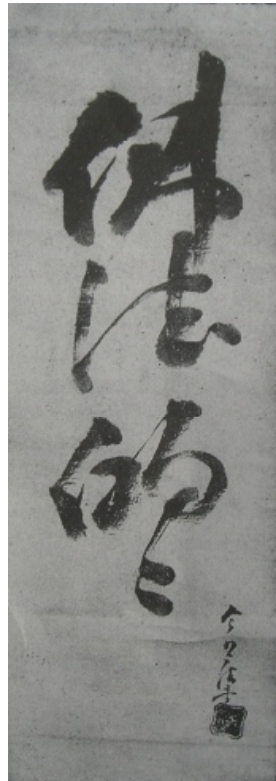
白水会（小堀家）や松風会（古田家）と合同の6月の菖蒲の茶会（八
代市 ^{しょうひんげん} 松濱軒：八代城主松井家の初代康之公は利休の弟子で、松井
家には利休の絶筆が伝えられています。松濱軒は、三代直之公が母君
のために1688年に建てた御茶屋です。）、11月の紅葉の茶会（泰勝寺跡）
では、他家のお席にも入れていただき、御三方（利休居士、幽齋公、
三齋公）の御作を初め、貴重なお道具を拝見させていただいたことも
度々です。

また、三派合同（裏千家流、表千家流、肥後古流）の芸術祭参加茶
会も、10月に泰勝寺跡で開かれ、ここでもま
た、たくさんの茶人との出会い、一期一会の
触れ合いがあります。

昨年、人間禅教団に「茶禅一味の会」が設
立され、9月22、23日と「茶禅一味の会記念
茶会」が催されました。肥後古流は、隠寮で濃

佛法的々

（右図）八表裏武者小路ノ三千家ノ ^{さんせんけ}
親交タル元伯宗旦老ノ書ニシテ当時
古流茶道ノ嫡伝古市宗庵老二真ノ盆
点ノ扱ヲ懇望シ之ヲ拝見シテ如何ニ ^{いか}
モ紹 ^{じょうおう} 鷗利久両翁ノ正統的々相伝ノ
正流ニ感嘆シテ礼状ト共ニ此書ヲ贈
呈セラレタルモノナリ 肥後茶道ノ
誇ト云ベシ ^{いこう}

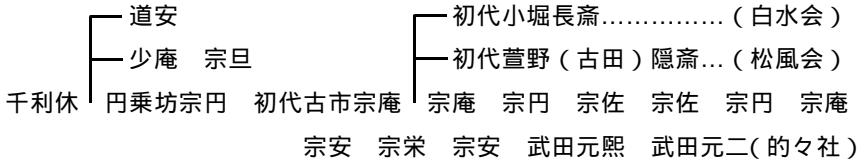


茶席を持たせていただきました。耕雲庵英山老大師ご遺愛のお茶入れ、青嶂庵古幹老師ご遺愛のお茶碗、磨甌庵却石老師ご愛用の水指、葆光庵春潭総裁老師御作のお茶杓で点前をさせていただきました。金剛庵老師、妙青庵老師、竜穩庵老居士をはじめ、遠来のお客様にお入りいただき、忘れ難いお茶席となりました。

茶道について、的々社十二世武田元二宗匠は、「お茶を通して自分を磨く、生涯が稽古です。」と、青嶂庵古幹老師は「茶道は如是法によせほうを道として行じ楽しむものです。」とおっしゃっております。

禅(人間禅)と茶道(肥後古流)のご縁に感謝して、これからも精進してまいりたいと思います。 合掌

< 茶道肥後古流の系譜 >



参考文献

- ・『細川三斎公三百五十年祭 記念誌』 茶道肥後古流(的々社・白水会・松風会)編
- ・『肥後古流について』 武田元熙著
- ・『茶道 肥後古流について』 石田博義著

著者プロフィール



中村慈光(本名/由紀子)
昭和23年、大分県日田市生まれ。昭和45年、熊本大学教育学部卒業。昭和42年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅布教師。